

染香

ぜんこう

福泉寺寺報
令和3年6月
第96号

(毎月1日発行)
ホームページ



会社へは
来るな と上司
行け と妻
第一生命保険入道作西

ツバメが本堂の中に...

五月に入ると、朝夕とツバメが飛び交っているのが、また季節を感じさせてくれます。今年は特に「コロナって何?」と言わんばかりに自由に飛行する姿が、何ともしやえずウラメシク映ります。

さて、ある方がご法事のために本堂に参られました。私が「ああ、ようこそ参られました!」と本堂の戸を開けた瞬間に一羽のツバメがスッと入ってきました。

「うつかりしたなあ」。ツバメも毎年お参りです。一度入ると、なかなか出てくれないのです。長いホウキやら、ポールやらを駆使してというより、本人は出たくて仕方ないのでしようが、警戒してなかなか下には降りて来ないのです。去年は、飛来に気づかず、翌朝、私のお勤めの席で冷たく丸まっていました。



その日は子どもたちと本堂に布団を敷いての見守りです。昼に追い回されたツバメは、一度も降りてきませんでした。

翌朝六時過ぎ、「去年に続いて、死なせてしまったか。どうしよう(ツバメ本人のほう)が、どうしよう(私)が」と思っていたとき、本堂の外から大勢のツバメの声が届いてきました。すると、あつという間に本堂のツバメは外に飛び立っていきました。



「そうか!」

一向に出口を見つけれないツバメを、一日中汗だくになって追い回しましたが、翌朝の、外からの「ひと声」に導かれていたのです。非常に「浄土真宗的」な出来事でした。人生は「どうしよう」の連続です。自分の知性や経験など、歯が立たない「どうしようもない私」に、ちゃんと「ひと声」がかけられているのです。

(住職)

お経のことば折々

《乃至(ないし)》

一般的法律用語として「または」とか「〇〇〇〇の」「の」のよるに範囲を表します。經典でも同じですが、もうひとつ、「数を限定しない」意味もあります。例えば、「一回でも、十回でも、百回でも」という具合です。

お寺やお墓にお参りした数、写経した数、読経した数、お念仏を称える数、お線香の本数...「多いほど良い」という考え方は、注意が必要かもしれません。

おてらから

ホームページができました



お待ちいたしました。約5年の構想です。お寺からの情報発信はもちろん、皆さまとの交流もできるようにしてあります。

皆さまの思いを「寺ま」に...



・本紙ウラ面の「寺ま」欄です。
・「好きなこと」「や」「昔のこと」「なんでもお書きください。住職がサポートします。
・「香色香光」は『仏説阿彌陀經』の言葉です。
個々の価値観を尊重する、自分の価値観を見つめ直す、そんな思いが込められています。

「コロナがけこみ寺」

予防接種の予約のお手紙をします。市(集団接種)の方法は掲示板に貼りました。お寺にもお訊ねください!

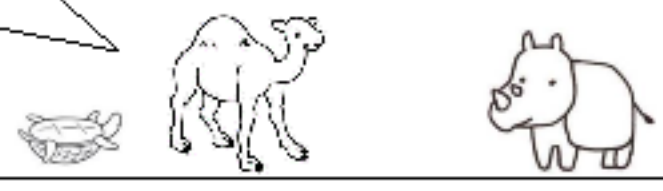
ちょっと あたまの こりほぐし

亀とラクダとサイが

お金を出し合って買い物をしました。

さて、何を買ったでしょうか?

答えは裏面です



不思議は味わうものである



昨年暮れ、聖典翻訳を三十七年間も続けてこられた、京女の徳永道雄先生の講話を聞いて、言葉で真実を伝えることの難しさをつくづく考えさせられた。お釈迦さまも阿弥陀さまのお徳を讃嘆された『大経』の中で、「阿弥陀さまの光明の気高く尊いことは、わたしが一劫というとても長い永い間、昼となく夜となく説き続け、でも、なお説き尽くすことができない」と言われている。『歎異抄』の十条にも「念仏には無義をもつて義とす。ふかしうふかきせつふかしき不可称不可説不可思議のゆゑにと仰せ候ひき」ともある。この不思議をどのように受け止めれば良いのだろう。仏教の真実は、理解するものでもなく、分析するものでもない。味わうもののである。

大阪の某市の水道局長から、こんな話を聞いたことがある。何がどうなっているのか、とにかく八月のお盆過ぎに水道局に苦情電話が集中するということである。

「こんな腐ったような水で、水道料を取るのか！」

「水道の水が臭くて飲めない、検査に来てほしい」

等々である。検査員を派遣しても、他の家におくっている水と変わりはない。臭いと言われるのなら、夏に入る

六、七月にカルキ等の匂いがキツイはずである。それが何故、お盆過ぎの今頃なのか。サッパリ、原因が分からない。ところが、ある検査員が報告

した一言で全貌が解明したのである。その検査員は「こんな水は、うちの田舎の井戸の水と比べたら泥水じゃ」と怒鳴られたと歎いたのである。「それ

だ！」ピンときた局長は各検査員に、苦情の出た家にお盆に里帰りをしてたかどうかを早速確かめさせた。推理

は当たった。九十九パーセント苦情の出た家は、里帰りをして故郷の美味

しい水を飲んでできた人たちだったのである。

最高のものを味わい続ければ、少し

でも味が落ちたものを口にすれば、理屈抜きに敏感に反応するのである。

そして対策はどうしたのか聞いてみた。ところが局長の言った言葉が凄

「何もしません。十日もすれば慣れるでしょう」。

泥水を飲むような毎日から、故郷の水飲むような暮らしを取り戻したものである。欲望と自分の都合で忘れてきた、先人のやってきた毎日の生活を思い出さねばならない。

（二）常見寺だより『平成十五年一月特別号』



（二）常見寺だより『平成十五年一月特別号』
（三）や、うまいやろ『利井明弘 平成二十一年』

青色青光

みなさんのリレー朗読

六年前まで、孫たちと六人家族で生活していましたが、息子の転勤で、一人暮らしとなってしまいました。

一人で守るには広すぎる畑。まず草の管理に頭が痛くなりました。息子は「草刈りしたら？」と申しましたが、人の目につく場所だけでもなんとかしては……。そんな時、コロナの拡大。仕事が出来なくなりました。畑には草取りと片付けに毎日通うようになり、畑の土が次第にきれいになっていくのが嬉しくなりました。

息子家族は時々帰ってきてくれます。私の出来なところを助けてもらいます。高一の孫には、慣れるための耕運をお願いすると、喜んで引き受けてくれます。回数を重ねると上手になりました。本人も嬉しいようですが、私も嬉しいです。おかげで飛り合いも出来て、夏野菜の苗を続々と植えています。

畑では、野菜・果実・花が次々に成長し、今は私の生きがい。喜び、元気をもらっています。

夏の収穫が楽しみです。孫たちに送ってやれる日が楽しみです。そして、また家族と一緒に生活出来る日まで、元気で守り続けてやりたいです。こんな私に生きがいを与えてくれたご先祖に感謝です。

（渡邊 富士子）